

【緑地を楽しむ本】

## 『エルシー・ピドック、ゆめでなわとびをする』

エリナー・ファージョン 作 シャーロット・ヴォーク 絵 石井 桃子 訳

岩波書店



9月21日は敬老の日。  
エルシー・ピドックは、  
ケーバーン山のふもとの  
グラインド村に生まれた  
女の子。村の女の子はみ  
んな、なわとびが好き。  
エルシーも3つになると、  
おとうちゃんのズボンつり  
でとびはじめ、誰もが認  
めるなわとび上手になっ  
ていきます。

ケーバーン山にはなわとび好きな妖精たちが住んでいて、「なわとび師匠」のアンディ・スパンディまでいました。エルシー・ピドックはこのアンディ・スパンディの目にかない、毎月、三日月の晩にケーバーン山でいろいろななわとびの跳び方を伝授されるのです。寝ている状態で。夢遊病という感じでしうか。その跳び方とは、二重跳び？ 交差跳び？ いえいえ、そんな普通の跳び方じゃありません。高とび、するりとび、おそとび、心配ごととはねとばせとび、強とび・等々。1年を終え、免許皆伝となり、その証にアンディはエルシーのなわとびの片方の柄

をさとうのキャンディに、もうかたほうはアマンド入りあめんぼうに変えてくれるのです。一生なくならないキャンディです。

そうして時は経ち、ケーバーン山の持ち主が変わり、工場を建てる話が持ち上がります。村人たちは反対しますが、領主はまったく聞く耳を持ちません。ある日、村の女の子の夢にアンディ・スパンディが現れ、「領主に、ケーバーン山でなわとびをしたことがある者がひとりのこらず、なわとびをとび終えたら工場を建て始めていい、と言え。」と言います。

領主はこの申し出に、いい余興だと同意します。代々、山でなわとびをしてきた昔の、そして今の女の子たちが少しでも長く跳ぼうと頑張ります。最後のおばあさんがつなを落とし、領主がレンガを埋めようとしたその時、109才のエルシーが現れるのです。あのキャンディの柄のなわとびを持って。

三日月の晩に山でなわとびをする、というのも幻想的。この間、散策した平和台から柿生方面にぬける山でエルシーがなわとびする姿を想像してしまいました。

(遠藤)